A中学校スクールカウンセリングにおける生徒の「入りやすさ」と「居心地の良さ」に関する環境心理学的視点での活動

丸　山　仁　美

An Environmental Psychological Approach to Entering into and Being Comfortable in the Counseling Room of a Junior High School

Hitomi MARUYAMA

要　約

スクールカウンセリングにおいては、相談援助活動の他に、昼休みや放課後にスクールカウンセラー室を開放し、生徒の居場所となることも重要である。これにおいて環境推論やアフォーダンスという環境心理学的視点にてスクールカウンセラー室の環境デザインを行うことで、スクールカウンセラー室への「入りやすさ」と「居心地の良さ」関する工夫を行った。またスクールカウンセラー室開放時に来室する生徒が３つに分類されると想定し、設置する玩具等の選定を行った。このような工夫を行った結果来室人数の増加がみられ、また一人で来室してもグループで来室しても、生徒が居心地よく過ごせているようであった。これまでスクールカウンセリングにおいて環境面は比較的軽視されがちであったが、このような環境面の工夫は有用であると思われる。

キーワード：スクールカウンセリング、環境心理学、中学校

１．はじめに

スクールカウンセリングは､生徒､保護者に対する相談活動および教職員へのコンサルテーションが業務の中心であることは周知の事であるが、スクールカウンセリングはそのような相談援助活動だけでは不十分である。田嶌（2006）が心理臨床家においては、面接室内での個人面接による援助活動だけでなく､｢居場所づくり｣やさまざまなネットワークを駆使してつなぎ支える｢ネットワーキング」の援助活動の視点と技能が必要であると述べていることから、スクールカウンセリングにおいても、相談援助活動の他に、居場所づくりやネットワーキングによる援助活動も重要だといえよう。筆者（丸山、2010）はスクールカウンセリングにおいて「不登校生徒個別ファイル」を作成し、それを用いた学校内の情報共有システムの構築を行った。それは先述の田嶌

（2006）では後者の「ネットワーキング」に当てはまるだろう。本論文では田嶌（2006）が述べている前者の「居場所づくり」の範疇である「居心地の良さ」に関してのスクールカウンセリングでの活動を、主に環境心理学的視点から記述したい。

子どもの居場所についてはこれまでいくつかの研究がなされてきた。住田（2003a）は子どもの居場所の構成条件には主観的条件と客観的条件があるとし、主観的条件は、そこに居ると子ども自身が安心や安らぎを感じ、またありのままの自分をそこに居る他者が受け入れてくれると確信できることである。また客観的条件にはさらに関係性と空間性の二つの条件があり、子どもが自分の抱く自己概念を受容し、承認してくれるような他者が存在しているという‘関係性’と、その実際の関係は一定の物理的空間において営まれるという‘空間性’の二つの条件によって構成されている。つまりそこに居るとホッと安心していられるところ、居心地の良いところ、というのは、そのような感覚をもたらす関係性と空間性がワンセットとして捉えられているべきものということである（住田、2003a）。そして様々なフィールドで子どもの居場所の研究は行われてきた。例えば、住田（2003b）は家庭生活領域・学校生活領域・地域生活領域のそれぞれにおいて、その領域での子どもの居場所と人間関係のありかたの関連性について研究しており、また武藤ら（2003）の研究では、幼稚園・小学校・中学校を調査対象とし、居場所と人間関係の構築の関係を、発達的な観点から検討している。また、澤田（2003）は居場所としての駄菓子屋という観点から、駄菓子屋の構造的特徴や、駄菓子屋店主と子どもが‘ななめの関係’であることが、子どもの居場所感とどのように関係しているかについて調査している。このような先行研究から、子どもの心的発達や、人間関係の発達ならびに心の健康において、子どもの居場所は重要であり、したがってスクールカウンセリングにおいても、居場所のない子どもに安心して居れる場所を提供する事は重要な援助活動の一つであるといえよう。

しかし実際のスクールカウンセリングではどうだろうか。学校の状況やニーズによって違いがあるだろうが、スクールカウンセラーが、必ずしも個別相談の対象では無い生徒にとってもスクールカウンセラー室を居場所としてほしいと思っているとして、スクールカウンセラー室を昼休みや放課後に全生徒に開放しても、居場所云々の前に、そもそも生徒がスクールカウンセラー室に寄りつかないという問題を抱えている場合も多いのではないだろうか。現在は一昔前よりも生徒の中にスクールカウンセラーが比較的浸透していると言えようが、生徒の中に‘スクールカウンセラーの部屋は問題を抱えた特別な生徒が行くところ’といった考えがあり、敷居の高さはやはりあるのではないだろうか。問題を抱えている／抱えていないにかかわらず、先述したように学校の中で生徒にスクールカウンセラー室を居場所として提供することは生徒への援助活動の一つであるが、その前提として、まずスクールカウンセラー室への敷居を低くしなければならない、つまり‘スクールカウンセラー室は誰でも入ってよい部屋’であることを生徒に認識してもらう必要がある。そしてその次に、スクールカウンセラー室に入室した生徒が、そこを居心地の良い居場所として感じてもらう必要があるだろう。生徒にこの「入りやすさ」と「居心地の良さ」を感じてもらうためには、スクールカウンセラー側の様々な工夫が求められよう。例えば生徒のど

のような話も受容的共感的に聴くなどであり、このスクールカウンセラーの基本的態度についてはほとんどのスクールカウンセリングの著作に記載されている。では、スクールカウンセリングの環境面についてはどうだろうか。長尾（1991）がスクールカウンセラー室の理想的な設置条件として、（１）明るく心が落ち着くような部屋の配置であること、（２）静かで他者からのぞかれたり聞かれたりしない場所であること、（３）どの生徒も気軽に入室しやすい配置の部屋であること、と述べている以上の、より具体的なスクールカウンセラー室の環境面での工夫、取り組みへの言及は見当たらない。先述したように、子どもの居場所は関係性と空間性がワンセットとして捉えられるべきものであり、スクールカウンセラーの態度という関係性ばかりに目を向けても不十分であると思われ、これまであまり注目されてこなかったスクールカウンセラー室の空間性により目を向け、工夫を加えることが、よりよいスクールカウンセリングの構築へとつながると思われる。以上の事から本論文ではスクールカウンセラー室への「入りやすさ」と「居心地の良さ」に関する環境心理学的視点での活動について記述する。

２．Ａ中学校スクールカウンセラー室に関する基本的情報

Ａ中学校は、１学年２クラス、全校６クラスの小規模校であった。またＡ中学校がスクールカウンセラーを配置するのは筆者が初年度であり、筆者がＡ中学校に着任した時点では、「スクールカウンセラー室」というものは存在していなかった。「こんな部屋ですみませんが・・・」と、教頭から申し訳なさそうに言われながら案内された部屋は、部屋の内部にさらにドア付きの小部屋があり、生徒指導用に室内がデザインされた部屋ではあったが、部屋全体にいろいろな物品や本や段ボールが乱雑に置かれており、おそらくＡ中学校はこれまで、この部屋を物置部屋として

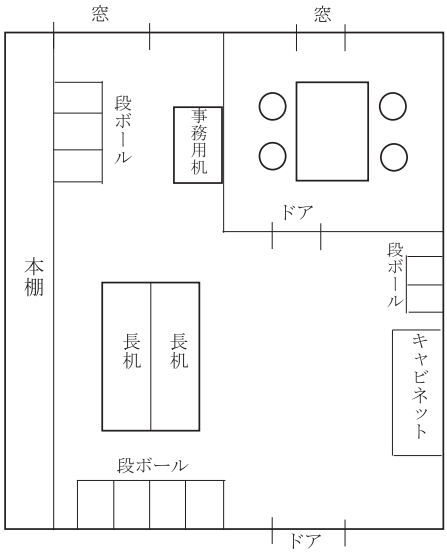

図１　筆者着任時のスクールカウンセラー室の状態

使用していたようであった。なおA中学校の生徒指導室は、より小さい別の部屋に設置されていた。筆者着任当初のスクールカウンセラー室の間取りを図１に示す。

３．スクールカウンセラー室の環境デザインにおける工夫

①環境推論の視点

先述したように、スクールカウンセラー室は、問題を抱えた生徒・保護者・教職員の相談を受ける部屋であるとともに、問題を抱えている／いないにかかわらず、学校の中で生徒の「居場所」となることもまた重要である。筆者はA中学校にてこの居場所活動を、昼休みと放課後の時間帯で相談が入っていない場合に、スクールカウンセラー室を全生徒に開放することにより行ったが、当初ただ部屋を開放してドアを開けておくだけで生徒がどんどん来室してくることはなかった。スクールカウンセラー配置が初年度であったA中学校では、まず全校生徒の前で筆者が挨拶し、また昼食時間には各教室を筆者が訪れて生徒と一緒に食事をしながら歓談したり、一緒に掃除をするなどして積極的にコミュニケーションをとるようにしていたし、「スクールカウンセラーだより」を隔週で配布するなどの広報活動も行い、生徒にスクールカウンセラーおよびスクールカウンセラー室の存在を認知してもらうための活動は行っていた。しかし昼休みと放課後にスクールカウンセラー室を開放しても、来室する生徒は最初の１～２か月はほとんどいなかった。A中学校はスクールカウンセラー設置が初年度であり、スクールカウンセラーというものに接するのが初めてであるゆえ、生徒たちから「スクールカウンセラーって一体何をする人なの？」「スクールカウンセラー室って入っていいの？」といった声をよく耳にし、生徒たちにスクールカウンセラー室に対する敷居の高さがあるのは、当然のことと思われた。筆者は、まずは‘スクールカウンセラー室は誰でも入ってよい部屋である’ことと‘他の教室とは違ってくつろげる場所である’ということを生徒に認識してもらうことが先決であると考え、上記の活動を行いながら、環境面において工夫をする事とした。

まず、生徒がその部屋がどのような部屋であるのか認識するためには、部屋の内側のデザインも重要であるが、内側はそもそも中に入らなければ見えないため、全ての生徒が目にする廊下から見える外側のデザインが、入りやすさの印象を与えるために効果的であると筆者は考えた。しかし学校の中で過剰な外側のデザインの変更をすることは難しい。そこで筆者は看板を木で作成することで外側を視覚的にアピールすることとした。看板の大きさは通常の学校の教室に付いている教室名のプレート（例えば「音楽室」「理科室」などの白いプラスチック製プレート）の10倍以上の大きさで、無垢の木の大きな板の上に、木の枝で『ほっとルーム』と文字を作り貼った物である。（ちなみに、『ほっとルーム』という名称は、スクールカウンセラー室の広報を兼ね、‘スクールカウンセラー室の名前募集’と生徒に公募し、決定した名称である）。このように、通常の教室よりもかなり大きいサイズで、木で作られた看板をスクールカウンセラー室の看板として部屋の入口に吊り下げることで、一見して‘ここは何か他の教室とは違う部屋のようだ’と

いった印象を生徒に与えることをねらいとした。

また他の外側のデザインについてだが、A中学校のスクールカウンセラー室は、上靴を脱いで入るようになっており、保健室などと同様に室内に靴棚が設置されていた。個人面接の際は、どの生徒が来室しているのか個人が特定されないよう、上靴は室内の靴棚に置くよう促していたが、開放時間帯に来室した生徒には、室内の靴棚に置かなくてよいと筆者は言っていた。つまりそのように言うことで、来室した生徒たちの上靴が入口付近の廊下に出たままの状態に、あえてしていた。このように部屋の入口に上靴がいくつも並んでいる状態を、廊下を歩いている生徒が見た場合、それは‘この部屋の中に何人も生徒がいる’という推論となる。またスクールカウンセラー室の窓やドアが開いていることも見ているため、それらの推論を総合して、‘スクールカウンセラー室は誰でも入って良い部屋である’という推論を導くであろうと推測した。

なお室内のデザインについては、もともとこの部屋の壁一面に本棚が設置されていたため、その雑然とした本棚を隠すために大きなカーテンを設置したが、それを暖色のクリーム色にした。また、長机に淡い色のチェック柄のビニール製テーブルクロスをかけ、その机上やキャビネット上にぬいぐるみをいくつか置いたり、室内にフェイクの観葉植物を置くことで、視覚的に一見して学校内の他の教室よりも暖かい印象を与えることをねらいとした（図２）。

このように無垢の木の大きな看板の設置、上靴を外から見えるように配置、温かみのある色彩や物品の設置という、室外室内の環境面を工夫した結果、開放時間帯に来室する生徒は徐々に増加し、筆者着任後一カ月程度は昼休みの来室生徒は一桁だったが、徐々に増えていき、６か月後には満杯の状態で後から来た生徒が入れないほどになることも多くなった。これら無垢の木の看板、上靴が見えるように配置されていること、カーテンやテーブルクロスの色、ぬいぐるみや観

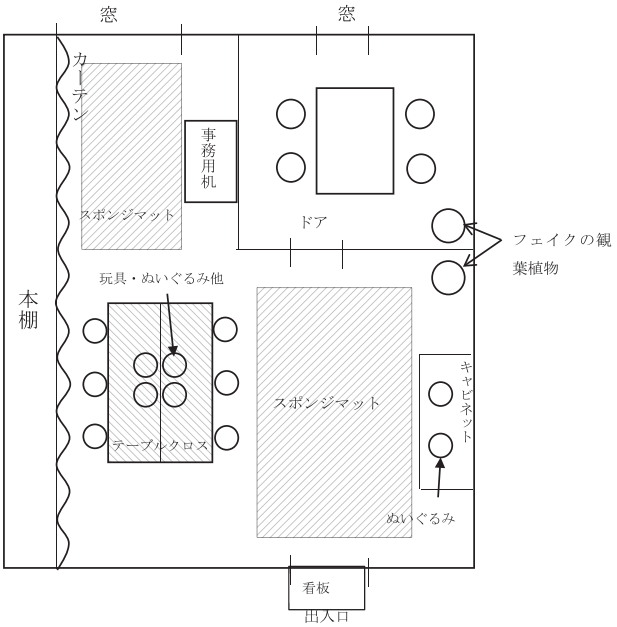

図２　環境面での工夫を行った後のスクールカウンセラー室の状態

葉植物は、それぞれが単独で入りやすい印象を与えるのでなく、環境推論の視点で考えることができる。環境推論とは、人間は環境の持つ物理的な特性、特に形態に対する直接的な知覚を行うだけでなく、その背後に存在する状況や意味についての間接的な推論を行っているということであり、例えば住宅の外見と内装から、そこの住人の特性（性格など）について推論するといったことである（羽生、2008）。このことから考えると、先述したスクールカウンセラー室の複数の環境特性を生徒が知覚し、それらを総合することによって、例えば「この部屋は安らげそうな部屋かもしれない」や「ここの中に居るスクールカウンセラーは暖かい人かもしれない」といった環境推論が行われ、それが生徒の「ここに入ってみようかな」という気持ちを促進させる一因となったのではないかと考えられる。

②アフォーダンスの視点

筆者がA中学校に着任した際、スクールカウンセラー室は普通の教室と同じ木目の床であったが、開放時間帯に来室する生徒たちから、「先生、ここに座ってもいいんですか？」と言われることが多かった。筆者としては当然座って良いと思っていたが、クラスでは教員から「地べたに座るな」と言われているためか、スクールカウンセラー室は床に座って良いのかどうかがあいまいに思われているであるようだった。このように生徒が筆者に尋ねたり、若干戸惑いつつ座ったり、グループが６個しか設置していない椅子のある机の方に行こうとするなどし、そのたびに筆者が「床に座っていいんだよ」と促していた。このような経緯で、スクールカウンセラー室に初めて入る生徒が､不安や戸惑いなく一見して‘この部屋は床に座って遊んだり話したりして良い’と認識できるようにする必要がでてきた。それは『床に座って良いです』という貼り紙を貼ることでも可能ではあるだろうが、そのような言語的な指示をせずとも、自然とその行動が促進されるアフォーダンスの視点を用いたデザインをする方がより良いと考えた。アフォーダンスとは、知覚心理学者の Gibson が提唱した概念で「生物の行為を可能にする環境の持っている特徴・性質」を意味している。この概念は環境デザインに応用することができ、その環境において求められる行動をアフォードすることが適切な環境のデザインである、すなわち環境デザインを調整することで、自然と望ましい・ふさわしい行動を促進することができるということである（羽生、2008）。そのような環境においては、人間が複雑な思考・判断をせずとも適切な行動をとりやすくなるため、適切な行動をさせるためのサインや指示を言語的に提示したり説明を行う必要性が低くなる。加えて環境から行動が自然に誘導されやすくなるため、状況の理解や意思決定などの認知的負担が減り、次にどういった行動をすればよいか迷うといった不快な経験をすることも少なくなるのである（羽生、2008）。

この‘スクールカウンセラー室の床に座る’という行動をアフォードするために、床に EVA 素材（固めのスポンジ素材）のカラーマットを敷いた（図２）。なおマットのサイズの調整をしやすいようにするためと、部屋を明るい雰囲気にするため、小さな正方形マットを連結して作る、ジョイント式のマットにし、色は黄色と黄緑色にて連結するとチェック柄になる物にした。この

ようにカラーマットを敷いたところ、以前のような座ることへの戸惑いを見せる生徒はいなくなり、グループで来室した生徒が、机の上の玩具（玩具については後述）を取り、マット部分に輪になって座るという行動が、筆者の指示なく自然に行われるようになった。このことから床にマットを敷くという環境デザインは、床に座るという行動をアフォードしたと言えよう。

また筆者が目的としていたアフォーダンスとは別であるが、マットを敷くことで、そこにグループで来た生徒たちが円形になって座り、トランプなどの玩具で遊んだり話をしたりするのが自然流れとなったゆえに、６つの椅子がある長机部分（図２）は、比較的一人で来室した生徒用として使われることが多くなっていき、生徒たちの間で‘グループは床で、一人で来た生徒は机で過ごす’というのがいつの間にか共通認識となっていった。このように同じスクールカウンセラー室の中でも、一人で来室した生徒とグループで来室した生徒が、筆者の指示なく、スクールカウンセラー室の中である程度居場所（物理的な意味での居場所）を住み分けられることで、にぎやかなスクールカウンセラー室の中で一人で来室した生徒がポツンと過ごすのではなく、比較的居心地よく過ごせていたように思われる。筆者が意図したものでは無く結果的にではあるが、マットを敷くという環境デザインは、もう一つの適切な行動をアフォードしていたと言えよう。

４．来室生徒の特徴を考慮したスクールカウンセラー室に設置する備品の選定

上述したようにスクールカウンセラー室の開放時間帯の来室人数は増加していったが、それは看板や室内デザインによるものだけでなく、設置した備品の選定によるところもあったと思われる。便宜上これらを別の章に記載するが、実際はこれらの活動は同時並行にて行ったことを先に述べておく。筆者は生徒がとりたてて用も無いのに、ただ「スクールカウンセラーと話をする」ためだけに、開放時間帯のスクールカウンセラー室に来室する生徒は、とりわけスクールカウンセラー配置初年度のＡ中学校では少ないと考え、スクールカウンセラー室内にいくつかの玩具等を設置することとした。スクールカウンセラー室にある程度の玩具を設置すること自体は、多くの学校にて行われている事であろうが、筆者はこの玩具の選定にあたって、まずこれまでのスクールカウンセラーとしての経験から、昼休みや放課後のスクールカウンセラー室開放時間帯に、相談目的では無く来室する生徒は大きく三種類に分かれると想定した。①一人で来室し、スクールカウンセラーと雑談したい生徒；何か問題があったときは、そこから相談となる。②一人で来室するが、とくにスクールカウンセラーとも積極的には話をしない生徒；担任からの情報によると、教室に居場所が無いようで、昼休みを一人で図書室などにて過ごしていることが多い。③複数人のグループで来室する生徒；スクールカウンセラーと話すというよりも、堅苦しい教室以外でたまり場として騒ぎたい思いがある。これら三種類の生徒が存在することを想定し、それらすべての生徒のニーズに応えることができるよう、スクールカウンセラー室に設置する玩具・物品の選定を行った。なお下記のすべての玩具は、スクールカウンセラーより管理職に提案し、許可を得た上で、予算の範囲内で購入した。

①一人で来室し、スクールカウンセラーと雑談したい生徒を主な対象とした玩具

一人で来室し、スクールカウンセラーと雑談したい生徒といっても、初回から積極的に話してくる生徒もいれば、話したい気持ちはあるけれど、どう話していいのかわからない生徒もいる。後者のような生徒のために、生徒と筆者が二人で遊べる玩具として、オセロを設置した。二人でオセロをしながら、徐々に色々な話をするといった用い方であった。将棋も置いてはいたが、昼休み時間内では勝負がつきにくいため、生徒にはその事を説明し、昼休みは主に将棋崩しとして使いるのみにした。

②一人で来室するが、とくにスクールカウンセラーとも積極的に話をしない生徒を主な対象とした玩具

自発的に来室しているのだが、スクールカウンセラーが話しかけても、そっけない返事や、無視をする生徒である。昼休みの教室での居場所の無さから、学校内をさまよい、スクールカウンセラー室にたどり着き、入ってみたのではないかと思われる。このような生徒には無理に話しかけず、‘一人でここにただ居るだけでもいいんだよ’というメッセージを暗に与えることが大事ではあるが、ただずっと座っているだけでは、生徒も所在なく居心地が悪いだろう。そのような生徒のために、特に他者とコミュニケーションすることなくとも遊べる玩具を置き、筆者より「こんなのあるけど、ちょっとしてみる？」と勧めるようにした。具体的には昼休み時間中で完成するような、年齢から考えるとピース数の少ないパズルを数種類と、やや簡単な知恵の輪である。昼休みという限られた時間で出来ることと、出来たというちょっとした達成感を感じられるためでもある。なお当然ながら、生徒がそれらをしているとき筆者から「すごいね、もうここまでパズルできたんだね」など時折言葉かけをし、こちらからコミュニケーションを働きかけることはしていた。このような生徒は、何回か来室すると、少しずつ話せるようになっていき、次第に学校での嫌な事などをポツリポツリと語るようになることが多かった。

③複数人のグループで来室する生徒を主な対象とした玩具

スクールカウンセラー室は②のような教室で居場所が無いであろうと思われる生徒だけが居れる部屋というだけなく、複数人の友達グループで来室し、ワイワイと楽しめる部屋であること、つまりスクールカウンセラー室が何らかの問題を抱えた生徒だけでなく、全生徒にとっての居場所となることが大切である。そのようにグループで来室する生徒のために、グループで楽しめる玩具として、トランプと UNO とジェンガを設置した。この中でもジェンガは当初、グループで来室する生徒を対象として設置したが、結果的に先述の一人で来室する生徒にとっても非常に良い玩具であった。例えば、筆者と一人で来室した生徒が先に二人でジェンガをしている最中に（ジェンガはスクールカウンセラー室に１個しか設置していない）、さらに別の生徒が一人で来室した際、トランプや UNO だと、途中から別の生徒がゲームに参加できないが、ジェンガだと筆者が「一緒にしようよ」誘い、途中から一緒に遊ぶことがしやすかった。このようにして一人

で来室した生徒同士は、最初はお互い話さないものの、筆者と交え一緒に遊ぶことによって、少しずつコミュニケーションできるようになることがよくみられた。また、筆者と一人で来室した生徒が二人でジェンガをしている最中に、複数人のグループが来室し「私達も一緒にしたい！入っていい？」とその生徒に聞いて、大勢でジェンガを囲むこともあった。その生徒にとっては、大勢のグループで遊ぶというのは、日常ではあまりない経験のようだったが、隣に筆者がいるため、あまり緊張せず遊べていたようだった。ジェンガは比較的短時間で決着がつくゲームであるということからも、スクールカウンセラー室の昼休み開放時間帯には適した玩具であると思われる。なお生徒の中には発達的に聴覚過敏の生徒がいる可能性もあるため、ジェンガは机ではなく床のマットの上で行うように配慮した。

最後に、あまり効果的では無かった玩具・物品について記載する。上記の他、スクールカウンセラー室にはＢ４サイズの紙、鉛筆、色鉛筆、油性マジック、クレヨンの描画セットを置いていたが、絵を描くことが好きな生徒以外、それらが手に取られることはほとんど無かった。また、こころやストレス、ストレスマネージメントに関する本もいくつか置いていたが、一人で来室する生徒であっても、それを読む生徒はほとんどいなかった。描画セットについては、そのような物品はある程度自分で学校に持ってくることが可能であり、生徒にはあまり魅力的に映らなかったと推測される。また本については、選定した本自体が生徒にとって魅力的では無かった可能性があるとともに、図書室と違い‘みんなが遊んでいる中自分だけ本を読んでいる’というのが他者にどう映るかが気になり、手に取らなかった可能性があるだろう。

５．さいごに

スクールカウンセリングについての著作は、数多く存在するが、そのほとんどがスクールカウンセラーの仕事内容や、心構え、身に付けるべき知識や技能、教職員との連携や、対応事例についてであり、環境心理学的な視点からの知見はほとんど見られない。環境心理学といえば建築分野、産業分野、犯罪分野などが連想されやすく、‘はじめに’にて述べたように、臨床心理学の領域では、環境面は‘プライバシーが保たれた静かな空間であること’といった言及の他は散見する程度であり、物理的な環境面は軽視されがちな印象を受ける。しかし、スクールカウンセラー室をどのようにデザインし、また何を設置するかといったことは、生徒がスクールカウンセラー室に入りやすくなるか、そしてそこを居心地の良い居場所として思ってもらえるかにとって重要なことであろう。つまり本論文にて述べた環境デザインは、学校の中でスクールカウンセリングが根付くかどうかを左右する大きな要因の一つであり、それらを環境心理学的な視点をもとに展開していくことは有用であると思われる。臨床心理学が見えない心を扱うものだからといって、目に見える環境面を軽視して良い理由には決してならない。むしろ目に見えない心を扱う場所だからこそ、それを受け入れるためにふさわしい器としての環境づくりが必要であると考える。本

論文は「入りやすさ」と「居心地の良さ」という視点であったが、学校によってスクールカウンセリングへのニーズは異なるため、そのニーズに合わせたスクールカウンセラー室のデザインが必要になるだろう。筆者が最後に述べたいのは、理想的な一つのスクールカウンセラー室のデザインがあるわけではなく、学校のニーズや生徒達の様子に合わせて、環境心理学的な視点を用いながら、その学校に適したスクールカウンセラー室を柔軟にデザインしていくことが重要だということである。

引用文献

羽生和紀（2008）　環境心理学－人間と環境の調和のために－　サイエンス社

丸山仁美（2010）　スクールカウンセラーとしてのA中学校における教職員間の情報共有と連携への支援　長崎純心大学心理教育相談センター紀要第９巻　pp85-97

武藤隆・堀越紀香・砂上史子・松井愛奈・本山方子・市川洋子・角谷詩織・野坂祐子(2003)　幼稚園・小学校・中学校における居場所の成立　住田正樹・南博文（編）　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会 pp271-317

長尾博（1991）学校カウンセリング－新しい学校教育にむけて－　ナカニシヤ出版

澤田英三（2003）居場所としての駄菓子屋－子どもとおばちゃん・おじちゃんとのななめの関係の実際－　住田正樹・南博文（編）　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会 pp319-343

住田正樹（2003a）　子どもたちの「居場所」と対人的世界　住田正樹・南博文（編）　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会 pp３-17

住田正樹（2003b）　子どもの「居場所」と対人関係　住田正樹・南博文（編）　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会 pp101-168

田嶌誠一（2006）　学校・施設等における人間環境臨床心理学的アプローチ　南博文（編）　環境心理学の新しいかたち　誠信書房　pp274-301

（2017年10月30日　受理）